

## [課題]

### 第4回課題 (1500字～2000字)

以下の2つの課題の中からいずれかを選んでレポートを作成して下さい。

- ① 日本の宗教発展における神道、儒教、道教、仏教の関係について述べなさい。

## [本文]

神道は、宗教というより、風習や社会の慣行、生活様式を示す習俗と呼ぶべきものである。神道には独自の哲学・思想がないので、日本人の習俗だと定義することができる。しかし、日本に仏教が伝来してきて、はじめて日本の支配階級はこれまでの習俗との違いを意識するようになった。『日本書紀』の用明天皇の序に、「天皇信仏法、尊神道（天皇は仏法を信じ、神道を尊ぶ）」とあり、仏教の伝来によって、初めて位置付けられたのである。<sup>1</sup>

古代には神話が重要な役割を果たし、ついで、祭祀が中心となり、中世から近世からは、教義が現れてくる。『古事記』や『日本書紀』に神話が数多く描かれるが、体系だって神道を意味づけるものではなかった。奈良時代には、日本の神を菩薩と呼んだり、仏の垂迹と考えたり、権現といたりするようになった。神仏習合説の普及で、日本各地に神社や寺院が作られていくが、神道そのものの理解が深まることはなかった。江戸時代の儒者の神道家の貝原益軒は神道の祭祀について「誠は天の道なり、之を誠にするは人の道なり」と述べ、神道を儒教の教理と結びつけて説明している。儒学・国学的な神道思想ということができ、近世神道思想の主流となっていった。

神道はもともと教義をもつものではなく、みな「祭り型」で、それに、いろいろな神話が伴っているケースが多かった。しかし、仏教、儒教などが入って来ると、その影響を受けて、「教え型」の教義が生まれてきた。<sup>2</sup>

儒教は仏教よりも早く、5世紀の初めごろに伝来した。当初は朝廷、貴族、僧侶によって学ばれ、宗教というよりは、政治哲学として受容され、推古天皇時の冠位十二階が「徳仁礼信義智」の儒教的徳目となったことに象徴されるように、律令国家体制の礎となっていった。鎌倉時代には朱子学が伝えられ、禅僧の間で学ばれた。日本の儒教は、神道、仏教と一体と見る思想が有力となり、臨済宗の五山文化のなかで受け継がれ、室町時代に全国的に普及した。室町時代の末には、五山文化の衰退とともに、禅儒の一致を否定して、仏教からの儒教の独立が唱えられるようになった。江戸時代には、神道と儒教を結びつけた神儒習合神道の流派も生まれた。儒教は、士農工商の身分制度や忠孝を旨とした武士道、家父長中心の家族道徳などを根拠づける思想として、幕府の封建支配を支える役割を果たした。<sup>3</sup>

明治時代に入ると、国教としての神道、天皇崇拝の儒教倫理とが結合され、『教育勅語』にみられるような倫理徳目が全国の教育機関や家庭において教授され、その実践が国家権力によって強調された。<sup>4</sup>

道教は仏教，儒教と同じ頃に日本に伝来したとされる。道教の教えや呪術とともに，道教と結びついている神仙説や陰陽五行説，易なども伝えられた。天武天皇は，仏教は仏教として尊重し信仰しながらも，それより道教思想を政治の基盤とした。八色の姓の最高位の「真人」は道教思想に由来するものである。また，『日本書紀』に記すに，「祓」ではなくて道教用語の「解除」と記している。さらに，伊勢神宮の皇大神宮の神様の装束は，道教的要素を含んでいる。天皇という称号も，道教の北極星を神格化した「天皇大帝」という後に由来する。このように，天武天皇の治世には，道教的色彩で国家が運営されたことが分かる。<sup>5</sup>

8世紀には，朝廷に陰陽寮が作られ，天文観測や吉凶の占いが行われた。道教の呪術は日本独特の陰陽道へと発展していった。道教の祭りや儀礼は，皇室の神道や神社の祭りにとり入れられた。陰陽道の影響で，日柄，方角などの吉凶の判断や星の信仰が盛んになった。

道教の中核をなすが神仙説である。神仙は不老不死の存在であり，人跡絶えた深山において一心不乱に静止すると，その人は神仙の姿をみることができる。浦島太郎や羽衣伝説もこの神仙説から出た御伽話である。日本では，道教はまとまった宗教の形では根を下ろさなかった。道教の唱える「無為自然」や「現世利益」の考え方は，神道や修験道にとけこむことによって，庶民の間で儒教の国家論とは違う世界観を提示していった。<sup>6 7</sup>

日本の神道，道教，仏教の密接な関わりを示す証拠となっているのが七福神信仰である。江戸時代の初めに上野の寛永寺を開いた天海大僧正が世に広めたと言われる。七福神とは，一般に恵比寿，大黒天，福祿寿，毘沙門天，布袋，寿老人，弁財天を指し，恵比寿は伊邪那岐命・伊邪那美命の間に生まれた子供，もしくは大国主神の息子であるとされ，古くから神道において漁業の神として信仰されていた。大黒天はヒンドゥー教の神であるが日本古来の大国主神の習合となり，食物，財福を司る神となった。毘沙門天，弁財天はともにヒンドゥー教の神であったが，仏教に取り入れられている。福寿録や寿老人は道教の神で南極星の化身であるとされる。最後に布袋は唐末期に実在したとされる禅僧の神である。<sup>8</sup>

文字数：1993 字

<引用・参考文献>

- 
- <sup>1</sup> ひろさちや『世界の宗教／宗教の世界』春秋社，2012，pp. 335-338 参考
  - <sup>2</sup> 小野祖教「神道」『世界の宗教 総解説』自由国民社，2001，pp. 319-332 参考
  - <sup>3</sup> 村上重良『世界の宗教』岩波書店，1980 pp. 103-104 参考
  - <sup>4</sup> 佐々木宏幹「儒教」『世界の宗教 総解説』自由国民社，2001，pp. 302 参考
  - <sup>5</sup> 上田正昭・鎌田純『日本の神々：「先代旧事本紀」の復権』大和書房，2004，pp.213-223 参考
  - <sup>6</sup> 村上重良前掲書，pp. 112-113 参考
  - <sup>7</sup> ひろさちや『世界の宗教／宗教の世界』春秋社，2012，pp. 299-300 参考
  - <sup>8</sup> 窪徳忠「道教」『世界の宗教 総解説』自由国民社，2001，pp. 317-318 参考